

うつら／＼と浅い眼を旅宿の二階に食る時枕許の煤けたラムプはジーツ／＼と音を立てるこんな時には私は小聲で君の名を呼び続けた

長いロウマンチックな旅路から漸く家へ歸つて来たのはお正月もどく過ぎて人は皆新しい活動を始めて居る頃だつた

あゝ君 私は毎晩々々月を仰いで獨りさびしい思ひ出に耽つて居るのだ 君の事旅の事 それからそれへと聯想の糸はくり出される 君も京の月を仰いで故郷の月を追懐して居る事だらう あゝ 異郷の友 君は最早異郷の友となつてしまつた

私はその異郷の友を思ふ毎に總ての世の歡樂に酔うて居る平安な生活を送つてゐる若い人達を羨みぬい若い人達を嫉み度い 呪ひ度い 此れが私の此の頃の生活にせめてもの慰安と平和を與へて呉れるのだ あ
一月の終りに 五燭の電燈の下で 失敬 (畢)

比叡登山の記

四乙 藤本弘治郎

時は之大正四年中秋。近江の芙蓉峯とも云ふべき比叡登山は催されたり。

樂しき夢路より醒めて停車場に急ぎぬ、空はほのかに紫立ちたれど山際猶ほの闇く、曉風冷やかに面を拂ひて喜色満面、待つこと暫時、車中の人となりぬ。

東方の連山糺糊として宛ら一幅の南畫の如し、懐しき天主は巍然として清空に聳立す。汽車は黄金の波打ち

寄する中を西に進み、芹川犬上川を過ぐるや能登川の入湖に送り迎へられ安土の城跡を過ぎて近江富士に名も高き三上山を眺望し、瀬田の長橋を渡りて、粟津ヶ原の松の景色をながめぬ。遙に琵琶湖上を見渡せば眞帆片帆の點綴せる詩趣豊なり。

之を過ぐるや間も無く、大津、大津とボーイの聲。

一同降車して驛前に整列して比叡山に向ひぬ。

行くこと二里餘、比叡山麓に着く。

山路は崎嶇として登るべからずと雖も銳意勇を鼓して舒々として登る。

山中は老松古杉、森々鬱々として或は仙境かと疑ひ或は神域かと思ふ、阪路幾險を経て遂に根本中堂に至り一軒の休息所にて中食を喫し、再び阪路をたどりて遂に四明ヶ嶽に登るを得たり。

眸を遠近に放てば、十萬の人家砥の如く、碁布羅列し瑞霧淡烟霧々たり。四方萬山千岳之を圍繞して近江芙蓉峯の名實に虚にあらざるなり。又西南には汽車の颯烟半空に翻り漠々墨の如し。而して東を觀れば琵琶の湖渺々として際なく、其の水南に流れて細狭となり、乃架するに大小の二橋を以てす世に之を瀬田の長橋と稱す。其他石山三井の連山を望むありて、一過すれば百憂散す、嗚呼 此の絶景 賞すべきなり。余臨視の間だ勃然として懷舊の情を興せり。此の山古來國家の盛衰に關せしこと尠からず。天慶の初め將門此に登りて叛逆を謀り。壽永の間朝日將軍の強兵を此に屯す。其他大塔宮の恢復 室町氏の存亡此の山を得ると得ざるとに依つて起れり。

吾等一日を費して此の山に登るも亦昔を思ふ助ならんかと友と語りて打ち笑ひぬ。

時過ぎければ下山しなやむ足を運びて大津驛に急ぎぬ。午後五時大津驛發列車にて彦根に歸りぬ。憶史上多大の價値ある比叡登山も有益に楽しく終りたり。

近郊の晩秋

三 甲 東 野 亮

小試験終へければ久し振りに野邊にても消遙はば氣もはれなむとて家を出でたり。灰色の雲、低くおし重りて動かす。秋らしからぬ日なり。村外れにて、農婦の薙の翹をかきあつむるを見る、日和ならば善く干るべき時刻なるに、さなければ斯くすなるべし。げに秋にこそ陽はてらまほしけれ。

伊吹山はいつもに似ず雲のか、りて見えず、他の山山もうすくけぶれる、春にあらねばいとけうとし。大堀の里につゞく街道の松並木、稻の刈られしよりもめづらし松の樹の間、所どころに赤くもみぢせるは櫻の葉なるべし。多賀の社の杜、土田のむら木立などは、紅、黄、翠、代赭いろいろに色探られて麗し。村の中にひとときは大きく黄ばめるはいはずもがな銀杏なり。今、陽のてらばさらに面白かるべきにと思へり。かなたこなた榛に藁の塔の如く、また土藏のやうに、高く積みあげられたるいとおほし。藁の田にまき散らし残されたる、わきてはさ竹狭杭の田より抜かれもやらすにあるなど、このごろの百姓家の忙しさ思ひやらるるなり先程よりからす殿はさ杭の上にて羽をやすめて、こ頸かたむけ思案顔にて、鶴鶴の二羽田圃を歩むを眺めてありしが、にはかに思ひ出したるやうに地面をかすめて翔び去りけり。

刈られたる水田の稻のきり口より、再び二三寸が程芽を出したるは、小春日和のあたたかさにいざなはれて延びしものなるべし。

路傍の草草はおほかたは枯れはてたり。赤き野茨の蔓いたくその上にからみをり。死人草の葉のみ獨り毒々しくみどりなり。野菊の二三輪かれ草の中に咲き遅れをれる、心ゆくばかりうれし。

小川の水、今やたねたねなり。さきに友と共に來し時は、目高、諸子鱗など樂しげに遊びをりしに今は影さへもね見ず。何處へ行きたるにや。ももやと枯草の川端をおほひたる、藁屑の川の中にはまりをれる、いとむさくろし。

百姓夫婦の粉扱ぎをなしむたる傍をすぎしに、見むきもせでいと世話しげに働き、もみのもがれてぼろぼろと落つる音いと快し。藁高くつまれし風かげに幼子おとなしく眠りゐたり。如何であたたかき陽のてらざるごとく、にてもつぶやきつ。

大根畠、こゝばかりは目さむるばかりにみどり鮮なり。白き根の太太と黒き土の中よりむくり出でたるは好もしくまた快し。畠の隅に一株の白菊すがすがしく咲きゐたり。獨りでに生わしものにや。また、主のあらば如何でどくた折らざる。人に愛でられもせであへなく散りくちむものに。いぢらし。

肥もち車の轍をどりて來れるに遇ふ。車曳く男しばし高聲に田芋を掘りある男と語りながら行きすぎつ。さむき風そよぎ初めぬ。猫柳の枯反葉の二三片はごからからと風に鳴りつゝも枝にありけり。

風いよよつよくなりてむかひの山に雨雲たちこめたればいそぎて家路につきぬ。

(大正四年十一月二十四日)

▲あちこちから書き散らして置いたのが、匣底から出て来た、是を纏めて茲に草したから、之を紙屑と題したのである。

▲吾人は青年てふ偉大なる誇りがある、青年は社會の中堅だから、誇つても敢て差支へはない、青年に對して暴力を加ふれば、其青年の筋肉は緊縮し、手足は震動し、血液は沸騰しなければ已まないものである。又此れに嘲罵を加ふれば精神は昂進し、銳氣は勃興し、勇氣更に百倍するのである、青年だと威張る間はそこに活動がある、彼の貧弱な秋の黄昏は青年てふ誇りが極めて薄い時で、其の時には青年らしい活動がない。

▲盛夏陶々毒炎燬くが如き日、蟬聲を聞くに堪へ難い、時に一陣の涼風と、一掬の清水は吾人に爽快を與へる、龍紋の水に快哉を唱へ、鼗聲百雷の如きは、畢竟世の激甚の生存競争に倦怠した徒輩の醜体なのである。此れよりは羊腸たる山徑に汗を流し潺湲たる峭崖巨岩の間に玉雪と碎くる清流に快を叫び、山頂に登りて憂心忽ち去つて萬事悉く形を忘れ瀟洒として、既に俗界を脱し彷彿として、忽ち仙境に入るの感を味ふ、即ち名山大川の偉大なる審美の靈光に浴せんには、旅行否徒歩旅行を描いて他に求むべからずである。

▲人我に對して「此の馬鹿者!!」と、罵る、我又彼を「馬鹿野郎!!」と、賣言葉に買言葉、彼の一拳、我一撃を酬ゆ、互に最後の月桂冠を得んと欲すれど其の心中は恐怖心があるからの鬨り合ひである。

▲終日營々逐々として活動する人生の行路、果して苦? 樂? 逆境と想像するも順境と想像するのも可である拙者は苦とも樂とも判別することに於て聊か躊躇する。

▲男の心は秋の空、女の心は春の空、

然らば青年の心は? と尋ねたら余は夏の空と答へる、霹靂一聲一天俄かに墨を流したる所は豪邁を意味し猛雨沛然として至り、紅塵を洗ひ盡す彼の夏の空、然かも男性的に晴れ渡り清風涼々として活動の氣、神氣颯に爽快にして清新の氣に蘇みがへらせる、故に青年の心は夏の如き快絶雄偉なる空の様にありたい。豊太閤の心は雷霆の轟くに譬へてもよいのである。

▲世界は永久、人世は束の間、嗚呼人生とは果敢ないものだ、此の間に振天動地の大業を成し遂げんとするのは難い、吾人は自然に對して天地の永久を思ひ、閑居して人生の果敢ないのを想像するのである。

▲人は満足を得た時は直に其の腦裡を去り、不満のことは何時までも念頭に泛ぶものである、人は實に得手勝手なものではないか?

▲不平、不満の事故があつたなら天に向ひ大聲に放唱せよ。其の心の煩悶を天は耳を傾けて一部始終聽いて呉れる、殊に秋の蒼穹は高い、我等の不平、不満、希望、自惚何んでも天は聽いて呉れる。

▲人は現在に満足しなければ不平がある。さて現在に満足すれば、將來の發展を阻害せらるゝに相違ない。此の中間の流に掉すことが困難中の大困難だ。

▲多忙なる時は痛快だ僕は何時も多忙なれど祈禱する、此の現代の社會には惡潮があつて、いつも絶えず彼の恐るべき誘惑を持って吾人を壓くに、安樂を以てする。

安樂即ち怠惰にして、「それにて可、勉むる勿れ」人生僅か五十年、働くも安逸に暮すも一生涯、金錢何するものぞ? 名譽何になる? 來りて我と樂しく遊び暮せ。」と誘惑するのは實に怠惰である。

修養の第一歩は勤勉にあるのだと、余は信ずる。
 多忙なれば、不知不識の裡に勤勉となるものである。
 ▲長い文章は結局冗長の弊を免るゝ事が出来ない、短かければ思想餘りて筆足らざる憾がある。されど統一した文章は、草するに時間を要する。されば前後もなく書き列ねた、それを謝して茲に擱筆する。(完)

敗者の告白

三 甲 奥 井 武 一

僕は落第した、意志薄弱の僕は、はげしい試験場の空氣の下に悲しい敗者として泣いた。落第をさとりはしてゐたものゝ、現實となつて僕の瞳に映つた時青天の霹靂の如き感じがあつた。

「どうどう自分も冷笑の人となつた」

僕は恨めしい口調で淋しい笑を微かに青ざめた頬に浮べた。僕と最も仲の悪い〇は白い眼で僕を見つめつゝ我利我利は學びの道における勝者たる誇りを見せつけようとした。

「あいつにまで」

僕は唇をかたくかたくかみしめた、そうして弱い自分の意志を今更後悔した。

「成績發表後如何に悔ゆともせんなく真面目なる勉強が自分の徳にて候」

東京の父からも熱海の母からもこう云うて手紙が来た此の文句が又僕の腦裏に浮んだのであつた。

「自分は決して人より以下の愚な頭でない筈だ、只自分の意志は弱い。弱い意志の僕は遂に競争者の中よりひ

きぬかれたのだ。首席とは何ぞ、彼は意志の強固な人なのだ彼は秀才といふ程の者ではない。たッー

僕は東へ／＼とあはたどしく走つて行く白い雲を眺めて深く嘆息した……………

華やかな麗しい春の日の、甘い／＼香りに圍繞された人々は、軽い春風に揺ぐ花の下に、歡樂を味ふのだけれども僕の身體には暖な日影を見ることが出来なかつた。優しい日影は僕の心から遠く離れて居た。

さうして苦しい學問に向つて、自分の意志を戦はさねばならなかつた。

僕は去年の春の嬉しかつたメモリーを胸に畫いては人知れず敗者のメランコリーを味うた。

風もないのに柳がそよ／＼となびき彼岸櫻の花片が一ひら二ひらはら／＼と散つた。

庭の南天の實を食ひに来たひよ鳥がバサ／＼と音立てた後は又々静寂にかへつた。

賤ヶ岳修學旅行記

三 乙 芝 井 匡 道

木の本の里まで

苔滑らかなる古英雄の墓碑を掃つては、春風秋雨の跡に泣き、尾花なびく古戰場頭に杖を停めては、兵どもが夢の跡を弔ふ、

岩石突兀たる峯に快哉を絶叫し、滾々たる清流に耳目を洗ふ、蓋し學生の快樂何物か此に如かん、時なる哉神無月の十九日、天晴れ氣澄む、我が彦中三年の健男兒は諸先生引率の下に午前七時過一抹の黒煙を後に、輕軌と軋り出づる車中の人となりぬ、金風颯々、神氣頓に快なるを覺ゆ、車中互に肩を並べ心を遠く前途に馳せ、哄笑雑談して相興す。

鴉の湖ゆら／＼として空と一つに融け、岸には人の影もなくして、白帆のみ沖に見ゆ、渡るも早き天の川白雲飛んで日はうら／＼と照り榮わたり、湖北に其の名も高き姉川の古戦場を思ひやり、思を遠く往時に馳せ感慨無量!!やゝありて木の本に着きたり時に八時二十分。

賤ヶ岳

大音村を過ぎ右に伊香神社を拜し、永くハートに描きし賤ヶ岳の古戦場近く來りぬ、緊輝一番蜿蜒蛇の如き羊腸たる路を此の村唯一の案内者なる源内翁の後に一行は續く、流汗淋漓、一步一喘一條の小徑益々急峻、登りつむれば忽ち闌然として、涼風枯木に颯々たり、流汗忽ち納まり涼氣頓に迫り、自ら肅然として襟を正さしむ。

次で琵琶の湖豁然として開け、青螺の竹生島近く碧波の上に浮び、漲碧油を流せる如くにて、撮れる雲の影乱れたり、宛然足の下から膏の如く廣がり、遠方は薄紫に煙て見る能はず、西哲の語に「都會は人の細工、田舎は神の造化と云ふ」。鴉の湖は、蒼天碧水、紫山明水、紅花綠葉、萬ゆる自然の美を具備す、實に神の造化の妙に對して、人工の醜惡を驚駭し又感じたるなり、歩を運ぶ事二町餘にしてこゝぞ曠世の英雄豊臣秀吉と與柴田とが、天正十一年互に鎬を削りし處、一朝戰雲すさむ。殺氣山河に滿ちて、旌旗翻翻として風に靡き銀兜露寒けき朝の野に閃く秀吉七万の兵、柴田勝豊を降し勝ち誇りて、雪崩の如く打ち寄せしかば、盛政退却し二十一日の未明、秀吉黒田觀音坂を進み、盛政を追撃し猿が馬場に至る。

柴田勝政退却軍の殿たり、盛政の命にて飯浦坂に戦ひしが秀吉之を見て盛に攻撃せしむ、七本槍、三振太刀の功名は此の時なり、

盛政退き、茂正に前田隊と會したるも支ふる能はず、長秀之を見て秀吉と共に總攻撃をなす、柴田軍の諸兵一時に潰散、柳瀬、沓掛に走ると云ふ、

鳥が鳴く！ あゝ鳥が鳴く！

血河を流し、屍山を築き、慘憺たる當年の状幻の如く腦裡に泛ぶ、

鳥が鳴く！ あゝ鳥が鳴く！

悪魔の如き死の神に呪はれし武士の夢は何處ぞ、山黙して語らず、記念碑又寂たり古の山吹く風音たわて秋風早くすゝきなびけり

荒涼たる古の殘墟、凄風落莫の天より落ちて、感慨殊更に深し、誰か往時を追想して感なからん。去りし年の春の雪淡き頃、琵琶一周の折、又來ん秋の葉にとゞ、fの兩氏と折りし松が枝もなし、

嗚呼！

中川清秀之墓 (大岩山)

青塚苔滑かして、只悲風咽ぶが如き聲して枯薄の上をわたるのみなり、熱血男子の靈、今果して何處に徘徊する、憶ふ昔千軍此の地に戦ふや、旗影草木を没し喊聲山河を撼かしたらん、旗影喊聲現在何處に存す、星霜枯骨に有り、歲月苔痕久し、愁雲漠々として一入の緊張を與ふ、我等昔の俤をしのびて一掬の涙禁する能はず中川清秀、熱血男子の靈はとことばに、竹帛に垂れん、

余 吾 湖

湖心碧澄にして玻璃の如き、余吾湖の次第に展開し來り、汀の漁村の煙水にうつりて此處ばかりは仙人の境の如く思はる、何心なく神祕的美を感じたるが如し秋の清き日の夕、此の幽寂な、神秘的な瑞西式の湖畔に佇みたらんには、如何なる刺戟を與ふらん、

月に水！ 涼しき夕！ 神あらむ

金龜城下まで

坂口村に至り渴を醫し、木の本に路をさる、木の本にて其の名も噴々たる延命地藏尊を拜し、各々秋の熟したる光に顔を赤らめ、再び汽車に投じて、思ひ出多き木の本を汽笛一聲後にして

正に三時半、

車中私は某書に記載しありし「あはれ秋の氣象何物かすべてこれ空明、照徹、剛克、雄健の一氣を以て貫かざる、何物かこれすべて哲人の雄姿、道士の風貌を以て、人に迫らざる秋は夢に非ずして事實なり、人は秋に立て直ちに事實と面相接する也」てふ題の下に某君と口角沫を飛ばして討論するまもなく

窓外を眺むれば、湖畔の秋色、一段身に込み、午後の日、湖上にゆらくと流れて金波を漂はしつ。

曠古の御大典御即位式を擧げさせ給ふて我が蜻蛉洲は平和の氣の充滿せるに反し、戰雲漲り阿鼻叫喚の歐洲大戰爭に討論は次第に傾く、

四時半になんなどする時故郷の如き懐かしき金龜城下に、

プラットホームの堅き石に一步二歩と運びし時始めて今日の旅行の終りしを知りぬ、一行は肅然として廣場に整列し、先生の一條の訓話を賜はりて解散しぬ、

失敬の聲起り、家路をさす七十の健男兒の歩み、

凱旋の卒に似たる哉、空は尙高く晴れたり。

(一九一六—二二四)

(突然本年に至りて命令により記せし爲め、印象甚だ淺きを憾とす)

安土城址遠足の記

第二學年 竹 村 春 雄

十月十九日一點の雲なし。七時集合直ちに出發して順禮街道に向ふ。天高くして馬肥ね、空朗らかにして氣澄める田舎の風光圓然として幽、廓然として曠なり。松並木を経て能登川を過ぎ山麓に沿ひて安土に至りぬ時正に十一時半なりき。

國亡びて山河ありとか、一時は天下に覇を稱へし信長の居城も、今や昔の俤は消ね濠は半埋まり石垣は崩れて雨露の痕を留めたる苔の深きに古りたる年の數も知られたり。天主閣址の下に垣を繞せる臺あり、寂寥として此地に眠る主こそ、曾つて赤手空拳天下の風雲を定め、其の威を天下に震ひし古英雄信長公なれ。吾等一同其の英魂を弔ひ林中に晝食を喫す、折柄吹く秋風の肅蕩たる音は宛ら當時の榮華を語るが如し。昨年暴風雨の爲に破壊せられたりし三重の塔の跡を眺めつつ總見寺址諸侯の屋敷跡を見る、茫茫として草生ひ茂れるのみ。仁王門を後にし階段を下りて歩む事十數町郷社沙々貴神社に達す、社は常樂寺村に鎮座し式内也。

境内の静かなる事大古の如くにして、神苑に鳥鳴くも喧しからず、神樹に風渡るも騒しからず。祭神は少彦名命にして、仁徳宇多兩天皇及敦實親王を併せ祭る。親王の孫源扶義公近江國守に任せられ本社を司り今尚連綿として、子孫相繼ぎ祭事を掌ると聞く。又社は源氏の氏神にして、代々源氏の信仰淺からず。境内に乃木大將手植の松あり、將軍已に世を去れ共松は青々として繁茂す、見る者將軍の偉大なる人格を追懷して限りなき感慨胸に溢るるなるべし。神社を出でて約三丁安土宗論にて名高き慈恩寺淨嚴院に至る、同社は特別保護建築物にして、聖徳太子の開基にかゝり本尊は阿彌陀佛也、一時兵火の爲に灰燼となりしも、信長僧明感をして、此寺に住ましめて淨土宗本山となせり。寺をいでて安土驛に至り、午後三時五十分汽車の便をかり同四時二十六分彦根着、三三五歸途に就けり。

御所拜觀の記

二乙 梅原與惣次

汽車は七條驛に我等五百の生徒、京都御所拜觀者を吐出しぬ。大厦高樓巍然と聳ゆる舊都の垣々たる大道を歩み御所御苑内に至りぬ。拜觀者の夥多なるには驚けり。老若相混じて二列に並びて、殺倒し、黒蛇をなして御苑内を蜿蜒として動き其の頭部のみ建禮門に近く達し居るが如し。かくして我等は御苑内の老松紅葉せる樹々の間を歩み遂に建禮門前に達し、西手に折れて潜門を入りぬ。更に進みて朱塗の月華門掖門を潜り、南庭に出でたり。

南庭に佇みて宸紫殿御即位式場を拜せし時の嚴肅の感は述ぶるに語なし。南庭には白川砂を一面に敷詰め微塵だも止めず。同時に眼に入るは目もあやなる錦旗の立てられたる光景なり。南階の左右に左近の櫻、右近の橘あり、櫻は根元が纏て一抱もあり、樹幹甚だしく苦むし、その葉既に紅葉して錦繡を染め、橘はこんもりと茂りてその葉は千年の緑を示し、小さき黄色の實は累累として萬代の齡を壽ぐ如く見受けられたり。

錦旗は林をなし、櫻側に日像蠶旛、八咫鳥旛、橘側に月像蠶旛、靈鷲旛華美を極めて立ち、左右に萬歳の旛、青赤黄白紫とりくゝの色の施せる御紋章附のもの各十本その前に鉾各十本立てられ、又鉦鼓立てられ、その光景の莊嚴なる自ら崇敬の念を起さしむ。更に歩を進めて、紫宸殿正面に到りぬ。遙か殿内の高御座及びその左方御帳臺を拜し奉り思はず襟を正せり。

親聖文武なる聖上陛下には此の尊き高御座に登らせ給ひて、皇位繼承の大詔を煥發せさせ給ひしなり、その美々しき莊嚴の趣きは到底筆舌の能く盡くす所に非ず。萬歳旗近く内閣總理大臣の聖壽萬歳三唱せられしとありき、予南庭の中に立ち低徊去る能はざるもの久し、建春門を潜り仙洞御所さして進みたり。御門内に入る。忽ちにして白砂の静境開けらるる處に出づ。松檉櫻等その白砂の禁苑の彼方此方に枝を交へ、晝尚暗く、却て神々しく感せらる。その奥深く神さびたる大嘗宮拜せられぬ。柴垣長く結ばる。

遙かの奥の左右に悠紀殿主基殿拜せらる、何れも簡古素朴の御構造、御屋根は萱もて葺かれ、近江菫つるされ、御柱は荒木の松と拜せられけり。その神々しさ古代の神います境に踏み入りしが如き感ありき。大嘗宮を拜し終り二條離宮に達し、大饗宴場を拜觀せり、饗宴場の大き四十間平方にして、その中心に美々しき舞樂殿設けられたり、左右に二基の毘太鼓据わらる。見上ぐれば天井は極彩色の草花を描き中央に採光のガラス窓の設けられたる外、八つの美事なる裝飾電燈を垂下し、その正面に玉座拜せらる。この舞樂

には久米舞五節舞太平樂萬歲樂等の舞樂殿ありしなり。玉座を拜し奉るに南面に設けられ、その背面に「千年松」の軟障かけられ、東には悠紀地方風俗の屏風、西に主基地方風俗の屏風立てられき。玉座の西には劍璽卒安の御案据わられたり、その莊嚴美麗を極むる光景は眼もさむるばかりなり。願ふに歐洲の天地戰雲今や酣なれど、獨り東洋の覇者たる我邦のみは既に干戈疾く收まりて、天皇陛下御即位の佳節に逢ふ。當時の御式の模様さへ詳に知り得らるるも皆皇威の津々浦々まで輝き渡り、陛下の人民を憐み給ふよりと察せられ、たゞ感激の涙に咽ぶのみ。

秋日遠足の記

一乙 森 拾 三

待ちに待つてゐた我等にとつては最も楽しい修學旅行も愈々十月十九日に實行された、當日は空ぼんやりと曇つて丁度薄絹でつゝまれた様極上天氣ではなかつたが旅行には眺向きの日であつた、常よりは早く起き充分の仕度をして學校に行つて見ると澤山の學友が自分と同じ様制服に辨當もちの姿で健氣に話して居た。午前八時集合して一年級甲乙丙合せて百五十名を四列に隊を組んで成宮先生及び各學級監に引牽せられて池寺西明寺への途に上つた。校門を出で京橋通りを眞直ぐに左へ曲り彦根稅務署の前をすぎ土橋町川原町安清町芹新町を通り上芹橋を越へ沼波町に來た。新町停車場を左に見大道を眞直ぐに進んだ。

空が灰色に曇つて雨雲が所々に動き早き秋雨しば／＼降つて來た。

大堀を過ぎ中仙道に出で鐵道線路を横切つて高宮に着いた。此處は近江線に沿ひ近來多賀線を此處より通じてゐる。兩側には各種の商店相並んでゐる。家の人々から珍らしげに、一行の姿を見送られた。村を離れ犬上川に出で空地で休憩した時分には雨はびたりと止んで雲と雲との間に青空が見えて時々太陽が姿を現はした。此れより乙丙甲の順序で犬上川堤を一町程進んで右に曲り桑畑を兩方にし暫くにして吳竹についた、線路を横切り四邊一面金色の稻秋風に波うつて居る間を行き最早刈られて稻扱で首と胴と二ツに分らるゝを

稲田の所々に見る。汽車が田圃の向ふに黒煙を立て、かひ／＼しく線路を走つて居るのを見る、稲田の彼方に尼子村の人家の白壁が見えて居た。

左に曲り右に曲り尼子村につき進んで在士に出で八幡神社の前をすぎ左右の家を眺めながら西明寺をさして進んだ、又二度稲田に出た時分には足にマメが出来て弱つて居たものも澤山あつたが自分は幸ひに肉刺も出來ず餘りわらく感しなかつたが長寺村をすぎ池寺村が遙か向ふに見えた時には自分は天にも上る心地で半間程の田舎道を進み村をすぎ道の片側に寺までの距離の書いてある石をたよりに進み時々松葉の入れる籠を掲げて山から歸る人に出合つた。

間もなく西明寺の山門についた時には手の舞ひ足の踏む所を知らなかつた、

左側にいくつかの坊を見て本堂前についた時は丁度十二時であつた。暫く堂前で休憩し解散して本堂で茶の御馳走を受け思ひ／＼に辨當を食べた。腹が空いて居たので竹の皮の辨當でも山海の珍味よりもうまく思つた。食後堂の中や塔の中を拜觀させてもらつた。聞けば此の寺は承和二年の創立で仁明天皇の勅願所である。

本堂は方七間で三層の塔鐘樓及び樓門がある 天正元年織田信長の兵火に罹り堂宇概ね灰燼となつた、そして慶長七年徳川氏寺領三十石を賜はつたと云ふ、本堂中には仁明天皇の御額及び古彫刻がある終りて三層の塔を見た中の壁柱板一切のものに美しく畫いてある午後一時半頃此の所を出發した 近邊の者は途中より歸る事にせられた 残りの若干の生徒は隊を組んでもと來た道を歸つた知らず、の間に犬上川に出た 堤に整列し後解散した我等は諸先生の後を歩んで居つた 一つの間にか數人は後れてしまつた 四邊を見渡せば我等數人のみで誰も其の外には見なかつた、二度鐵道線路を横切りこれより變化のない道を考んで大堀沼波を過ぎ彦根の街に着いた 自分は鬼の首でも取つた心地で足の痛さも忘れてしまつた、岡町大橋町を過ぎ橋本町川原町江戸町を通つて午後四時卅分無事家に着いた、早速風呂で疲れを治して日誌を認めて床に就いた。



一月のある日ぐれ

五甲 仙波

健

何とほなしに
 悪魔のごとき色は
 うればしげに吾がほとりを包む
 何とほなしに
 物のけの糞ふがごと
 吾が胸はあやしう蘇けり
 夢のごとくに
 今日のごと日のまぼろしは現れぬ
 ほのぐらき中に
 花ぞ散るらんかるた二三枚
 を、それよ今日の歡樂のあとなる
 集まりしまらうごは皆去りぬ

乱れたる座蒲團に残る温み
 あゝ歡樂のあとは悲哀なりき
 夕日は沈めり
 物の化の影はしも
 一重／＼に濃くぞなりゆく
 歡樂はをはれり
 疲れたる頭を抑へて
 寂寞と悲哀とに圍まれつゝ
 机に凭れたる一月のある日ぐれ

大正の和歌

五甲 佐々木 正樹

さら／＼と吹く夕風に波よせぬ古城が丘は夏しげり
 して
 管笠や乙女道者の一列に水の霑する夕なみ木かな
 眞夏日は手水とる井の竹垣に衣更へする銀蛇に燃ぬ
 銀の玉雨と降る日を芭蕉葉の窓に香炷き經誦するわ
 れ

友思ふ心はいつも變らねど病めると聞けば猶まさりけり
 里川や並木を森へ草つき狐嫁入る晝に雨かな
 永劫に心こほりぬ頬をつたふ涙に花のいかで咲くべき
 小雨降る逢魔が時を香炷きて淋しう聞きぬ百八の鐘
 去にし日の罪は問はざれ遠山に霞める雪は詩によからずや
 つれづれと病みのむしろにわはす君が幸多かれと祈る雪の日
 北山は雪眞白き夕暮やいとひませよと病む友たもふ
 梅にはふ小さき村へ御僧の講にゆきまます臘夜の路

部 報

學藝部報

御大典 八高蘭交會講演會

十一月十四日 本日こそは万乘の帝位を踐ませ給へ

我が今上陛下が皇統紹述の儀をたまねく皇祖皇宗に告げ給ふ吉き日なり 折柄地方遊説の途にある八高蘭交會々員諸氏本校學藝部の請を容れて午後一時より本校講堂に於て大典紀念講演會を開かる
 澄み渡る晩秋の青空 若き男の子の赤き血は彌か上にも躍る 若き人々の雄辯此れに共鳴して知らず知らず喝采し拍手する我れ等 かくして秋の半日を有益に意義あるべく暮し得たるを深く蘭交會々員諸氏に謝す

會する者百名余辯士も聴衆も熱誠と眞率とを以て或は語り或は聞く 眞に緊張せる會合なりき
 開會之辭 太田部長

挨拶の言 鹿苑慈教君
 蘭交會成立の由來を説きて曰く「我が蘭交會は八高獨法科二年の有志者の會合なり目的は辯論の琢磨にあり」と、君は本校出身の人在校中より已に學藝部大會に於て一方の雄を稱せり 聴衆早くも君が快辯に魅せらる

國民の自覺 細野三千雄君
 眞の自覺は赤裸々となるにあり 而してそは青年

に於て最も必要に又最も可能なるものなり 物質主義自然主義其の他オイケンの哲學或は何或は何と説く所十にして止らず 而かも吾人は特に赤子にかへるを眞の自覺を叫ばんとす と言ふか君の演説の大意なりき 態度溫柔されど余りおとなし過ぎたの嫌あり今少しく活氣欲しかりき

帝政と支那 近藤源治君

支那の過去を説き現在を言ひ内には儒佛に賊せられ外には烈強に蠶食せられ遂に滅亡の期に達せんとすと斷す 其の東洋の形勢を説き黄色人種の萎靡を慨する邊り辯士の頬は紅潮を呈し來り聴衆耳をかたむけて謹聽す

支那の内情を説くや頗る細 日本民族の奮起を促すや頗る烈 されど論題とは余り脱線的氣味ありき

言語明徹態度至誠 實に眞率の辯なり
 國家的自覺 阿坂久雄君

自覺に二あり 人數としての最高目的を自覺するもの其の一 國家としての最高目的を自覺するもの其の二余は其の後者を説かんとすと前掲して

維新の志士には國家的自覺ありて個人的自覺なかりき現代人士には個人的自覺ありて國家的自覺なしと喝破す 戦後民族の競争軋轢は愈々激烈なるに至らん 此の秋に際し強烈なる國家的自覺の吾が青年人士の間に起らん事を熱望すと結んで壇を下る

論旨明暢 流暢の辯なり

眞の強者 鹽原時三郎君

壇上に胸をたゞいて獅子吼する偉丈夫 音吐朗々として大洋の波濤に向ふか如き感あらしむる辯實にや此の論題を説くにふさはしき堂々たる雄姿なり 強者盛へ弱者衰へ強國盛へて弱國衰ふの言を前提して諸々眞の強者の意義を説く

要は正義にあり正義の命する所正義の指す處金錢何ぞ富貴何ぞ 正義の劔を眞額にふりかざして正義の爲めに戦ふ これこそ眞の強き人たれ といふにありき

西郷翁の「命も入らず金も入らず」云々の言を引き來りて眞の強者は胸に一物を藏せず心に一埃を止めず只之れ正 只之れ義 此を尊重すと絶叫す

諷刺あり諧謔あり滑稽談あり 實に餘裕ある辯
悠揚迫らざる辯 又眞の強者らしき辯なり

南洋と日本發展 木崎爲之君

前辯士に反して短軀の人 而かも聲量豊富 グン
人の肺腑につき入るか如き澄み渡りたる聲
もて今や高潮に達せる聽衆を愈か上にも熱狂せし
む

咳一咳 吾輩の嫌なものは第一に耶蘇教であると
喝破するや百雷の如き喝采滿堂に起る 第二に嫌
なものは佛教である 第三に嫌なものは厭世悲觀
する青白い書生である

聽衆の熱狂は最高點に達せり 卓をたゞいて怒號
する壇上の君が雄姿 恰も激流奔湍を迸らすの思
あらしむ

南洋の實見談を語り大日本帝國教を鼓吹し太平洋
をして琵琶湖たらしめよと絶叫す

熱血の迸る如き辯 論旨明晰 最後迄聽衆の熱狂
を保ちたるは實に快辯といふべし

歐州戦乱所感 鹿苑慈教君

滔々大河の流るゝ如き雄辯 追ひかけつめかけ歐

も折れよや手も抜けよや、元氣ある健兒の力試さん
とて勇み立ちし我等は試験の終りし夕、試験の疲勞
も打ち忘れ希望に勵まされなつかしき父母の膝下に
歸らんとする我校友と袂を分ち日頃練習せし端艇比
良に打ち乗り琵琶湖を遠漕し腕を鍛へんと先づ大溝
に向ひぬ。湖上波靜かにして水禽舷をかすめ夕を告
ぐる鐘の音は永く其の餘韻を残し艇はクラチの音緩
るやかに油の如き水面を滑り早や多景島近くなりぬ
る其の時、數道の白氣高く東天に冲るかど見れば玲
瓏たる滿月は皎皎として顯れ月の光は未だ薄暮の光
を蔽へる水面に閃々として輝けり。我等は快哉を
叫びつゝ多景島に上陸し見塔寺に詣で我等の武運長
久を祈り再び艇に乗りて西江州に向ふ。此の頃より
南風運きりに吹き波漸く高く白石島附近に近づける
時は波浪高く水は艇内に侵入し。手に汗を握りしこ
とも一二度にはあらざりしなり。されど大溝附近に
來れる頃には風も漸く風ぎ波も靜まり午后十時半大
溝附近なる白鬚神社の湖岸に無事着し大溝に宿す。
明くれば二十七日我等は八時大溝を出發し大津に向
ふ途中奉公團選手に遇ふ聞けは昨日大溝に遠漕せし

州戦乱の遠因に溯り或はスラブ帝國を説き或は
ゲルマニ大王國を説く

乱麻の如く紛糾する交戰國の國際關係を詳述して
餘蘊らなかしめ引いて東洋に於ける帝國の地位世
界に於ける帝國の地位を論じて大日本帝國主義を
叫び國民に大覺悟大決心を要すと結ぶ

さすがは本校出の雄辯家なり 量目か知らねど
本日の最も出色せるものと思はれき

太田部長の閉會之辭を以て會を閉づ時に一時半
夕陽西近江の連山にかゝりて涼風熱せる吾等が兩頬
にさゝやく さらば 幸多かれ 八高蘭交會々員諸
氏 (星甫記)

水上部報

石場濱出漕記

時はれ七月二十六日午後六時暑き晝の梢に過ぎ夕の
涼風面を拂ふ時ならむ我等選手は石場に開かるゝ武
德會競漕に出漕せんとて端艇に乗り大津に向ひぬ。
學期試験中一日もかゝらず練習に練習を重ねオール

なりと。堅田にて晝食を喫し堅田より大津に直航し
午後一時以路波團福岡師範の炎熱を冒して練習せる
を見つゝ石場に着し指定旅館個亭に入りぬ。
着津以來日大の端艇にて朝夕二回猛烈なる練習
をなし千百メートルのレースコースを引き、其の猛
烈なる練習は日を積んで益々猛烈となり、三十日に
我第二選手を迎へてよりは勇氣百倍し益々激勵し益
々練習し猛烈に猛烈を加へ日の過ぐるをも覺わす勵
む中光陰矢の如く去り扶搖萬里の風に馭すべき八月
四日とはなりぬ。曇りもやらぬ晴れもせぬ朝早く起
き齋戒沐浴前の神社に參拜し我が彦根中學の戰勝を
祈りて朝食の膳に向へば何れも無言しかも其のしま
れる唇云はずの内になニ小齋ナの意ほの見へたり
午前九時號砲一發激盪たる琵琶湖に反響するや、茲
に琵琶湖上の大オリツムビック會の幕は切つて落さ
れたり。當日第一回の松江中學京都二中は意氣昂然
として乗艇、審判船御幸凡此れを曳き嚙咬たる奏樂
に送られてスタートに向ふ。此の時一天騒ぎ曇りて
陰晴定かならず東風は颯々として湖面を打ち琵琶の
水波又漸く強からんとす、炎威燒くが如き鏖熱の連

日に練習を重ねたる各校の選手等風激しく波高き當日に於て其の眞面目を發揮すべく手に唾して立てり男子笑まんとすれば當に此の時、蛟龍雲中に玉を争ひ鯨鯢水上に相搏つゝの壯觀見る者をして血涌き肉躍らしむ。

スタートラインに就きし二艇一發の號砲を合圖に三り出づ、京都二中初めより優勢にして遂に山陰の雄者松江中學を破り、第二回に於て膳所中學四國の強者徳島中學を破り第三回とはなりぬ、是れ我彦陽の健兒活躍の秋なり。

責任レース

位置 着順 分數

彦根中學第一(赤) 三コース 一 五分五十四秒
小波俱樂部 (白) ニコース 二 五分五十九秒
小波俱樂部は馬場附近の強者嘗つては八幡商業の端艇選手をせし人もありと聞く日頃の練習分數は我と伯仲せり、しがれども我等の眼中には優勝旗の外何物もあらず、一昨年我が先輩は僅か五分の一秒の差を以て惜しき勝利を米子中學に譲れり。我等此の先輩の後を襲ふもの遺恨骨髓に徹せる橋城下の健兒此の恨晴らさずして何の面目あつて先輩に見えん。

叱咤石場濱一體凄慘の氣充ち宛然奔馬の如き波浪は滔々の音を立て、去來し競漕の困難想像するに難からず。折から響く號砲を合圖に二艇は走り出づ、二艇怒濤と戦ひ互に雌雄を争ひしも激しき風波の爲め日頃の力十分に發揮する能はず勝を俱樂部に譲りしは遺憾千萬なり。春秋に當む我が第二選手來らん時には捲土重來し覇を中原に争はん。其の時の武者振目覺しからん

學校名

位置 着順 分數

彦根中學第二(白) ニコース 二 六分十八秒
彦根中學第一(赤) 三コース 一 五分五十三秒
引き續き特選レース名譽レースの抽籤を行ふに風雨尙は甚しく端艇轉覆の恐れあるより、午后三時第七回を了ると共に競漕中止は發表せられたりしかば一同旅舎に引き揚げたり。旅館に歸れば優勝旗我手にあらんばかりの意氣にて其の怪氣焰續出せしも、さすが疲れし身體美味なる夕食もそこそこに明日の戦勝を祈りつゝ眠に就く。
明くれば五日氣遣ひに氣遣ひし風雨も未明より漸く止み、前日の冷氣に比し蒸し暑さも湖面波靜かにし

此の時に至るや天帝益々其威を逞くして天地晦冥風益々甚しく大粒の雨沛然として殺到し激浪益々其の高きを加へんとし、我等選手の意氣奮に倍して高く審判船御幸丸に曳かれてスタートラインに向ふ。轟然たる號砲と共に彼我の二艇はスタートを切りぬ日頃の漕力これ見よどばかり力漕に力漕またたく間に三百米のボールを過ぎ互に力を争ふ、此の時白漸く乱れ艇足衰へ四百米よりは我常に白を抑制しつゝ力漕す、九百米のボールにして我約一艇身彼れに先んじ遂に白を一艇身の後にして決勝線を突破す。快なる哉赤旗審判船上に飄々たり、責任を全うせる我等心中の得意や思ふべし。更に今茲に記すべき事は總裁伏見宮殿下の御台覽あらせられし一事なり。殿下の御台覽競漕に列せし我等の光榮勝利の歡喜と共に永く忘ること能はざるなり。
第四回の往年湖上に覇を稱せし奉公團と西方三百里の果より遠征の舟を起せる福岡師範との興味あるレース及び池二三回の競漕の後、第六回即ち我が彦根第二選手對打出俱樂部とのレースは引續き雨中にも拘らず決行せられたり此の時風伯益々怒號し雨師又

て絶好のレース日和とはなれり。

希望に充てる我々再び會場の門をくぐれば早や多くの觀衆、選手等詰め掛たり、中にも前日の勝者は得意満面に昨日の敗者は今日を辱を雪ぎ凱歌を奏せんす勢にて控へたり。回移り變はる事三度遂に名譽競漕とはなりぬ。

名譽レース

位置 着順 分數

彦根中學第一(赤) 三コース 一 五分十六秒
膳所中學校 (青) 一コース 二 五分三十三秒
京都第二中學(白) ニコース 三 五分四十一秒
敵は共に湖南の雄者膳所中學は嘗つては湖に覇を稱せりと聞くされど我等の意氣已に敵を呑み細雨瀟々たる中をスタートラインに就く。此の時吾が應援團の諸氏卒業者の諸君の熱誠溢るゝばかりの應援を受く、其の友情の厚き今更にあらざるも感謝に堪へぬ次第なり。號砲一發三艇は弦を離れたる強矢の如くオールの響勇ましくスタートを放れたり、敵もさる者力漕に力漕し我は彼等に先んせんとして艇足を早めピッチ三十四を算したり。五百米にして我れ青白を抜しこと一艇身半、七百米にして三艇身、我艇九百

君秋山君澁谷君等の先輩に對して謹んで感謝の意を表す。

出場選手

第一選手

第二選手

- 舵手 松村黄次郎 辻 傳二郎
- 整調 皆木 覺 原 健三
- 五番 松岡源之眞 藤本弘二郎
- 四番 夏原勘三 松川 武吉
- 三番 上田重三 若林太良平
- 二番 三露英之助 土田清一郎
- 舳手 小島新二郎 長谷川 彌一

(松村記)

米のボールを過ぐるやラストへビー高く絶叫するや漕手等日頃鍛へし鐵腕も折れよとばかりオールも折れよとばかり力漕又力漕遂に五艇身の勝利を以て決勝線を突破し名譽の優勝旗を得たり、快なる哉。名譽ある優勝旗を先きにし意氣揚々として引き揚ぐる我等の喜び心中に溢れ抑へんとすれど双頬に喜びの色滿つるを如何せん、これに反し膳中二中の選手等并つては湖南に雄飛せし強者等の校友に慰めらるゝ其の心中、悄然たる選手を慰むる校友の心中如何なりけん。彼等遂に志を得ず空しく己が郷里に歸る胸中如何に遺憾に思ひ如何に奮激せしならむ。來るべき時の彼等の活動必らずや目覺しきものあらむ。

斯くて我等年來望みたる優勝旗も我手に落ち石塲濱出漕は成功したり。此の名譽ある光ある月桂冠と共に我等の忘るべからざるは校友會應援團の諸君の後援なり、我等の責任を全うし此の名譽を得しは我等の力のみにあらずして我が校友會應援團の諸君の多大なる援助によれる事也。終りに臨み我等在津中多大の援助を與へられし吉井

祝勝水上大會記

我が水上部の七選手はかの名譽ある優勝旗を肩にして凱旋せられた。八月五日午後五時、天は泣きかけて居た。停車場には熊瀬川先生と澁谷兄と私とだけだつた。優勝旗を歓迎するのには餘りに見すばらしい人數だ。汽車は着した。噫名譽ある月桂冠は我

彦中の頭上に五年振りで降つた。

十月四日。夫は選手優勝の日から六十日目だつた。

祝勝大會は開かれた。

第一回

三艇整列 青軍の舵手松村は覇軍の舵手として石塲濱に記録を留めた勇將である。ボールに至る迄青赤並行白はニコースにあつて少しく後る、廻航後青は和船に妨げられて後れた。赤は大脱線をして白のコースを奪つてニコース線外に於て決勝線に入る。審判官はゴールアウトを有効として一等の宣告をした。青、村岸組六分八秒、白西村組七分

第二回

青 服部組 二着 六分四八秒
赤 夏原組 一着 六分四六秒
緊張したレースだつた、殆んど優劣ない。赤のラストに於て半艇身を勝つたのは努力の賜。

第三回

青 横居組 一着 六分二三秒
赤 三露組 二着 七分一六秒
青軍は豪傑の顔解れ、赤の及ぶべき所にあらず。

第四回

青 上田重組 二着 七分三六秒
白 野瀬組 一着 六分一六秒
殆んど兩艇獨漕の如し

第五回

青 中村重組 二着 六分五五秒
赤 三木組 一着 六分二三秒
白 片野組
赤始めより優勢終に勝つ

第六回 職員レース(直航)

赤 坂、池田、藤川、大植、村上、畑、熊瀬川
白 堀、山岡、本多、青木、森下、立花、金澤
各先生方の腕前天晴く。赤軍始め優勢と見わしが勝負運強き堀先生の策畧圖にあたり半艇身の勝赤、二分五四秒、白二分四九秒、白軍の三番森下先生の働き振りは第一等。先生上陸して「敵ながら感心ぢや」と。本多先生の手附は慥な附。藤川先生の漕法も三嘆の價値があり過ぎて後はムニヤムニヤ。

池田先生繩の帶して舵手整調兼行の忙しさ。坂先

生はコックス臺上にニコノとして御座る。兩軍共四番は確實漕手。

第七回

赤 谷田組 二着 六分四〇秒二分之一
白 福原組 一着 六分四〇秒

當日の好取組。廻航に赤少しく後れミツドルに於て其差半艇身。ラストに至るや兩艇猛烈に戦ひ、決勝線前五間頃より赤の意氣益揚り、一本毎に漸次刻を奏し其差一尺に及びし時白決勝線に突入し其差間一髪。

第八回

青 青柳組 一着 七分十七秒
赤 廣野組 ゴールアウト

赤の勝と思ひきや三番手ラストに力漕してゴールアウトとなる。

第九回

青 佐々木組 二着 六分五一秒二分之一
赤 安澤組 一着 六分三〇秒

往路 白は直行 青は斜行 赤は蛇行し、白最も

誰か恍惚たらざるを得ん。

第一選手

五分五五秒

第二選手

六分十秒

五分臺のレコードは此一回のみ

第十三回

青 小野組 一着 六分三〇秒
赤 三木組 二着 六分五〇秒

青廻航後へビーを出して勝つ、

第十四回

青 倉垣組 一着 六分五五秒
白 奥村組 二着 六分五七秒

半艇身の着又好取組たり

第十五回 對級レース

青四年 辻、原、藤本、山口、松岡、土田、山田
赤三年 長屋、廣島、田畑、西村、若林、芝井、河村
白二年 藤井、漢見、東、門根、瀧澤、中井、田中
當日第一の呼物なり。青一コースに白二コースに赤三コースに夫々整列すれば各相當年級は聲をかりして應援す。號砲一發、煙波をかすめて燕の如く三艇スベリ出しぬ。四年は第一第二の混合選手

優勢。歸路白斜行して赤のコースを奪ひ一着、青は直行。赤は例によつて蛇行を續けて最後の光榮を擔ふ。

第十回

青 藤原組 一着 六分十秒
赤 山本組 二着 六分四〇秒

白 西田組

成績良好、

第十一回

青 中村民組 二着 七分四〇秒
白 清水組 一着 六分一九秒

テンド物にならず。此位の差になると見物の方で愛想がつきる。

第十二回 獨漕

第一選手 松村黄次郎、皆木覺、松岡源之眞、夏原勘三、上田重三、三盛英之助、小島新二郎
第二選手 辻傳次郎、原健三、藤本弘二郎、山口廣吉、若林太良平、土田清一郎、山田雄吉
湖上香關西の霸王の雄姿、太陽の光を斜に受けて肩章の色を水に寫して、一様に動く手、跳る水沫

なれば其の鋒銳きは勿論なれど、見よ。二年級の若人の赤き血潮を。廻航に於て二年先づ始む、然れども熟練せざる爲か半艇身後る。三年四年は伯仲の間において鎬を削る。ラストに至るや老功の四年は果然潛勢力を出して急調又急調。三年を抜き去る事一艇身餘なり。三年二着

青 一着 六分二秒

赤 二着 六分十秒

白 三着 六分十三秒

第十六回 特選レース

二着中の好成绩なるもののレースなり
青 服部組 (三回の青)
赤 山本組 (十回の赤)

白 谷田組 (八回の白)

赤獨り後る。白青を抜く事半艇身、白六分十秒

第十七回 名譽レース

一着中の優勝者レースなり。
青 藤原組 (十回の青)
赤 野瀬組 (五回の白)
白 清水組 (十一回の白)

夕陽湖面にあたつて金波を漾す。
力漕又力漕青は遂に月桂冠を得たり。赤二着
青 藤原、松宮、高橋、平田、松岡、野村、金森
タイム、六分十三秒
かくして祝勝水上大會も目出度く終りを告げ、學
校の萬歳を三唱して散會す、時に午後四時半。

庭球部報

岐阜師範大垣中學遠征記

十月廿四日午後一時より岐阜縣師範學校々庭に於て
本校對岐阜師範の庭球試合あり 師範は愛知一中を
除きては關西球會に中等學校の覇を握れるもの 終
に左の如き成績を以て本校の敗に歸す

◎は優待組

- | | |
|---------------|---------------|
| 師範 本校 | 師範 本校 |
| 1 (鈴木三……○) 森川 | 2 (鈴木三……○) 猪田 |
| (松田三……○) 三上 | (松田三……○) 伏木 |
| 3 (二本三……○) 園 | 4 (二本三……○) 坂東 |
| (大塚三……○) 白鬚 | (大塚三……○) 久米 |

- | | |
|--|---------------|
| 5 (横山三……○) 森川 | 6 (横山三……○) 文室 |
| (岩島三……○) 渡邊 | (岩島三……○) 倉垣 |
| 師範不戦組は岩島大塚組小島服部組和田各務組の
三組なり | |
| 同日午後三時半より大垣中學校々庭に於て本校對大
垣中學校との庭球試合を行ふ 大垣中學とは先年一
度相見わし事あり 今亦對戦するに至れり スコー
ア左の如し | |
| 1 (鈴木三……○) 森川 | 2 (鈴木三……○) 猪田 |
| (森島三……○) 三上 | (森島三……○) 伏木 |
| 3 (田中二……○) 園 | 4 (松居三……○) 園 |
| (和田二……○) 白髭 | (佐部利三……○) 園 |
| 5 (松居一……○) 坂東 | 6 (河村一……○) 坂東 |
| (佐部利一……○) 久米 | (川瀬一……○) 久米 |
| 7 (荻榮二……○) 文室 | |
| (榎本二……○) 倉垣 | |

次で大垣中學の優待組鈴木森島組と本校文室倉垣組
と對戦中日早くも西山に没し剩へ驟雨將に至らんと
して試合續行頗る困難となりたれば遂に仕合中止と
なして散會せり
同日岐阜中學校とも對戦する豫定なりしに當日に及

びて急に見合せの報に接し仕合不可能となれり

縣下聯合庭球大會

九月廿四日秋季皇靈祭の佳節をトし中秋の風清らけ
き本校々庭に於て縣下聯合庭球大會を舉行す 來り
會するもの本校選手を始めとして阪本佛中八商長農
師範膳中の各校選手かて、加へて各校の應援團 愛
校の赤血を漲らして勢猛く聲援す 金龜城下黄葉の
舞ふ所火花を散らして激戦せり
本校選手素より筋金入りの鐵腕あり 日頃の練習此
の時ぞと計り力の限り腕の限り打つて打つて打ちま
くりしが遂に最優勝の桂冠をかち得ず 涙をのんで
兜をぬぐ あゝ慘なるものよ汝の名は敗戦報告者な
り敗軍の將兵を談せずとは言へ當路者の責務を感じ
て筆をとり僅かに此の記録をものしつ

1 佛中 (福地 猪田)
寺澤三……一本校 (伊木)
喝采場裡に大會の幕は切つて落されぬ
猪田ロビングを以て寺澤をあせらせ福地鐵砲を以て
突撃す 本大會劈頭の手合せとして看客の血を湧か
しめしもの

- | | |
|---|--|
| 2 膳中 (美濃部 園) | 3 師範 (柳野 谷口) |
| (福永二……○) 三本校 (白髭) | (古田二……○) 三膳中 (速水) |
| 本校組は共に初陣の若武者なり如何あらんか人を
して手に汗を握らしめしに美事強敵を破りし手並は
天晴なり | 4 膳中 (日比 辻川) |
| | (中野三……○) 二長濃 (千葉) |
| | 5 八商 (鈴木 梅正) |
| | (南三……○) 佛中 (森本) |
| | 6 師範 (浦谷 森川) |
| | (西田○……○) 三本校 (三上) |
| | 森川ロビングを以て敵を繰り観客をしてアツと言は
しむ 三上の手腕亦中々にあなごりがたし至嗚々々 |
| | 7 八商 (松村 可知) |
| | (大塚三……○) 本校 (渡邊) |
| | 本校組よく勉めしと雖も遂に仆る 強敵なり |
| | 8 佛中 (野田 阪東) |
| | (森○……○) 三本校 (久米) |

阪東の鐵砲野田の半ロビンダ久米のスマツシング互にまけず劣らず戦へり絶好の力入りたる試合なり

9 佛中(金剛三)……一長濃(廣田西田)

10 八商(川島三)……二佛中(魚住西條)

敵味方共に戦上手なり 四騎の荒武者或は右に或は左に一上一下火花を散して相争ふ 眞に當日の見物なり

11 長濃(永原三)……一膳中(雲田附)

12 師範(山本一)……三本校(文室倉垣)

佐々バツク拙し文室ロビンダアウト續出 而かも倉垣と提携して遂に敵を仆す 御手柄々々々

13 八商(安本二)……二師範(村城林)

14 膳中(開田一)……三八商(横山木戸)

一は關西の雄他は江湖の驍 激戦目覺まし 此れにて對校普通試合を終り更に優勝試合に移る 優勝仕合

1 佛中(福地三)……○本校(園白髭)

ヤンヤの喝采裡に優勝仕合に移る 園白髭よく善戦せしも遂に仆さる

2 八商(鈴木三)……二(森川三上)

好取組なりしも八商組稍優りしか森川のロビンダ空しく奏功せず

3 八商(松村三)……○膳中(谷口速水)

4 本校(久米三)……○佛中(金剛馬本)

阪東得意の熱球を連發すれば久米亦大いにスマツシングを以て奮ふ 遂に敵を一蹴に附す

5 膳中(日比二)……三八商(川島西田)

腕に差なし 膳中の敗れしは天運か

6 八商(安本三)……○本校(文室倉垣)

大将と副將の顔合せ 安本敏捷遂に敗る

7 八商(横山三)……一長農(永原清水)

横山負傷而も尙奮戦勝を制せしは天晴れ

8 八商(川島三)……○佛中(福地寺澤)

9 八商(安本三)……二本校(阪東)

眩々相摩するの活劇 互に秘術をつくして戦ひしが遂に勝を敵に得らる 敗將の胸中や哀れ 此れを以て本日の大會をこつ 終りに臨み遠來の選手諸君及び應援團諸君の熱誠を謝し併せて本校應援團々員諸君の熱烈なる聲援を感謝す

武術部報

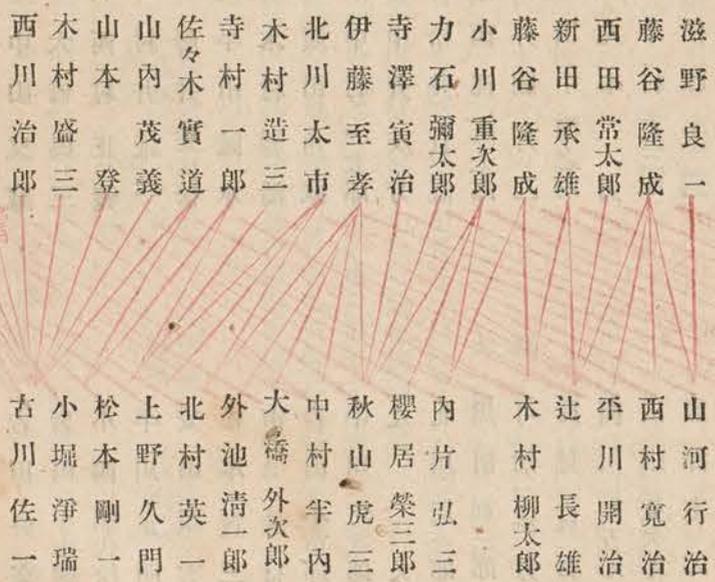
武術大會之記

大正四年十月八日

秋高く氣澄み満目蕭條たり此時此日こそ畏くも陛下未だ東宮にましますしとき御鳳輦を當地に向けさせられ親しく本校を訪れ給ひし日なれ 其當時慶雲の金龜城頭に漂ひしおもかげを回顧し奉るに早や五年の昔とはなりぬ 豈此の千載不遇の應事を紀念せんため此處に劍柔道

大會は開かれぬ。活氣は彦陽の天地に漲り吾五百の健兒は意氣揚り拔山倒海の概ありき

劍道部紅白試合



堀田善七
相場捨三
三上外吉
野口三二
八田孝一
村田幸太郎
津田孝太郎
加藤德太郎
藤田太郎
山口保雄
西澤重一郎
大堀松三郎
松澤良瑞
天方義治
瀬古銚三
秋山虎三
楠臥龍
宇野織之助
伊藤謙吉
片岡和夫

大鳥居蕃
梅原與惣治
竹中聯之助
疋田次太郎
原參藏
音瀬宇一
小市捨次郎
竹村春雄
石原孫次郎
八重練正之助

田井中棄造
松本覽造
竹原林次郎
藤田德次郎
一守愛之助
丸橋茂信
平野實善
中島武次郎
寺村貞次

中山又藏
大橋與三
西村正義
村井謙一
藤井登代松
平田誠水
木村源治
廣田角藏
中村一太郎
中井友芳
松井貞直
西澤藤太郎
井關丹三
田中德之助
丸本勇
小村貞三郎
伊藤太三
中村三郎
漢見快俊
渡邊勝己

吉田好文
岩田小市郎
小西彌代松
平川正明
安田紫雲
松本實三
市毛景行
岩田小市郎
中川鐵次郎
辻一夫
北川周一郎
黒田利三郎
可知猛男
長見貫石
西川庄五郎
田畑久次郎
熊澤宰一郎
紫田太四郎
中村仁三郎
徳永徹照

大清水教道
森居嘉秀
門根秀次郎
辻傳治郎
山岡秀雄
川島與太郎
服部良
大久保定彦
三木淇久夫
田中與惣彌
木之下四郎兵衛
吉田廣次郎
皆木覺
小森敏夫
馬場重太郎
小川桂瑞
坂東久太郎
坂本弘治郎
藤本幸造
瀬川幸造

山川秀二
中村久五郎
滿島文太郎
山本秀雄
廣島清十郎
東野亮
芝井匡道
今村吉之助
大鳥居武彦
佐々木正樹
金森武雄
末松秀雄
奥西真次
佐藤勇雄
長屋直義
奥村義輔
木村馨
猿橋重雄
堤本重雄
大鳥居武彦

廣瀬蓮麿
松村黃次郎
三越幾太郎
副植田小一郎
大廣野鐘一郎

大平佐一郎
井上新一
夏原勘三
池山秀夫
小島新二郎
北村彦一郎
藤村小次郎
副中村民之助
大 山本三郎

今日こそ日頃の怪腕を表すべけれヤッお胴ッお面ッ
と龍戦虎鬪汗を握らしむる壯観何處に得べけん
嗟々頼母しき健兒万身の勇を鼓して其潑瀾たる元氣
は往時の赤鬼を惚ばしむ此の日幸に八幡商業よりは
一粒選びの諸少壯劍客の御出を辱うし茲に一段の光
を増せり先づ

廣田角 (本校) ○○
塚本英 (本校) ○○
廣野 (本校) ○○
高木 (八商) ○○

山本三 (本校) ○○
塚本 (八商) ○○

廣田の眼中に敵なくヤッ／＼と互に睨み合ふこと數
分敵塚本漸くあせり出し大刀先急しく折しもあれ御

胴ツと観る者眼くらみて知らず漸くにして審判一本を宣告しつゞく御胴ツにて又一本を得美事本校生徒二甲廣田の勝となる時に歡聲湧き拍手の音高し次に現れ出しは之なん山本拍手の中に場の中央に至り懇懃に禮し沈着にして何れが挑戦すとも見わざりけり折しも御面ツと敵漸く一本を得山本漸く聲張り上げるとき敵一度得し味を覺ね又もや御面ツと思ひしに山本躰をヒラリと側向けて特意の御胴一本つゞく二の太刀に又もや鮮かなる御胴合して二本を得敵悄然と去れるに反し健兒は神に入るが如き山本の妙技に熱狂し拍手喝采の聲万雷の吼ゆるか如かりき

此の大勝に於て山本我劍道部の聲價を上ぐることに更に數段なりき

次には先に二友のもろくも打負しにいたく悄氣返りし敵の大將高木此方よりは廣野喝采の裡にむかへられてやがて互に相別れヤツ／＼と懸聲のみにて少時やゝたちて廣野挑戦し相共に千變万化の秘術を盡し分れてはより又寄りては分れかくすること十數分つ

いに廣野御小手ツと美事一本を得敵は我れ負けてはならじと益々たけり狂ひ暫しは人間業にもあらざるが如く戦ひ合ひ一向勝負つかんとも見わざりきやがて廣野何處か隙を見せたりけん敵は此度ぞと許りに打込むを廣野カチリと受けとめて平然たり恐ろしきものといはむかやがて高木吹く息あらく漸くにして小手一本を得格闘數十分に及びければ引分となれり 嗟々美事なるかな吾勇士!!

其後本校紅白試合に移り互に大聲あげて日頃ならひ覺ねし秘術をつくして戦ふ遂に紅軍利あらず池山のために數名を失ひ三越やゝせしも又藤村の手に燈れ又もや副將を失ひ大將親しく戦ふやがて山本出でて兩雄共に惡戰苦闘をなし或は前に或は後ろに或は躰を躲ししも廣野も遂に山本の胴にはたまりかね遂に月桂冠は山本に!!時に午後三時四十分白軍の熱狂的の歡喜名狀するに言葉なし時に夕陽勇士の誇顔を照して赤し

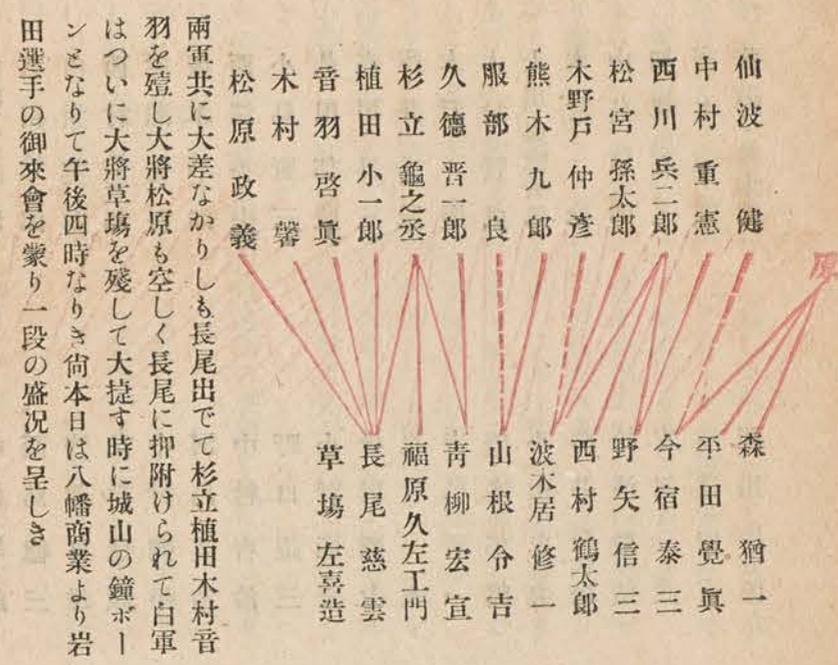
柔道部紅白試合

紅軍
熊瀬川 越明
石田 捨三郎
白鬚 英露
西村 捨三郎
能瀬 完吾
塚本 爲太郎
西澤 秀夫
小島 賢三
久田 郁藏
高田 昇三
藤井 了照
木戸 巖
木村 賢成
土川 與惣次郎
木村 稔
中島 猪太郎
加藤 亮三
宮本 龍憲
藤野 孝太郎

白軍
中村 良太郎
西島 徳三
安部 外雄
島津 龍藏
中村 彌平
河島 英造
中村 吉治
野口 謙三
小野 綱三
松居 彌七
北村 一夫
寺島 研一
橋本 郁郎
小山 忠夫
藤井 登代松
松波 敬造
安部 敬武
高橋 留吉
西川 庄五郎

大野 秀夫
中居 謙治
大久保 明文
野田 淨曜
日夏 友治郎
椋田 廣治
菅沼 弘
西村 弘
東 全次
梶 益三
大久保 正夫
中居 正治
三越 幾太郎
住井 富士雄
瀧澤 信夫
瀧谷 武雄
豊満 春了
熊澤 宰一郎
北村 藤三郎
原 健三

藤井 悌造
成宮 秀夫
田中 常吉
大久保 進一
浦山 一夫
荒川 泰輔
辻 與左工門
水原 完
中川 文三
山田 興城
伊之坂 三州
鶴飼 文治郎
伊之坂 三州
寺田 奎太
若林 太郎平
西村 正雄
鶴飼 文治郎
藤村 小二郎
山田 雄吉
坂 安彦



音羽特意の跳腰にて難なく敵を燈して莞爾たり時に健兒歡喜の聲道場を揺りて余韻嫋々たり

二一〇

角力部報

本部は本年度に至り師範として、昔時關西に勇名を走せたりし走り馬關を招き稽古に余念無かりしが終に十一月十四日を以て第一回大會を催す事となれり朝來天氣晴朗、絶好の角力日和に加へて、八幡商業學校選手をも招きて對校試合を爲す豫定なりしかば人氣いと盛なり。

先、一二年級生徒の紅白試合をなす。

東 新田 森 廣 平 川開
 小 塚 熊 瀨 田
 山 内 北 川 太
 今 井 木 村
 小 原 小 河 原
 力 石 林
 山 田 森

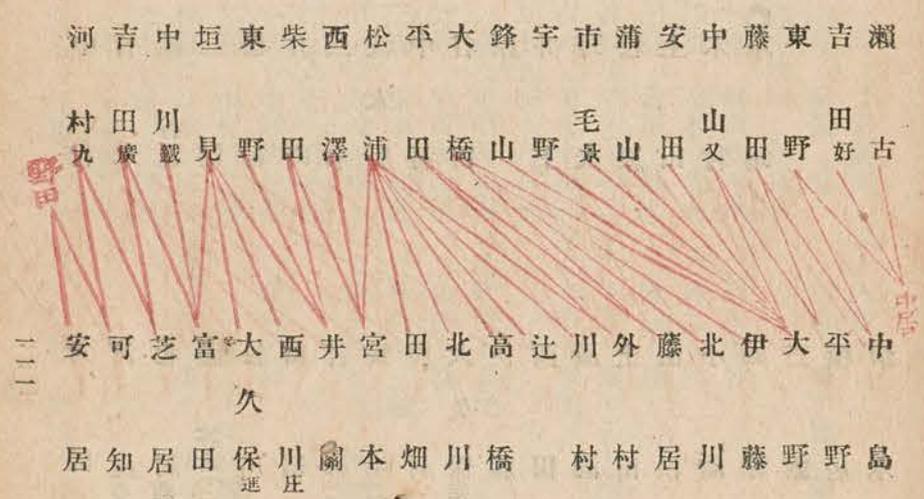
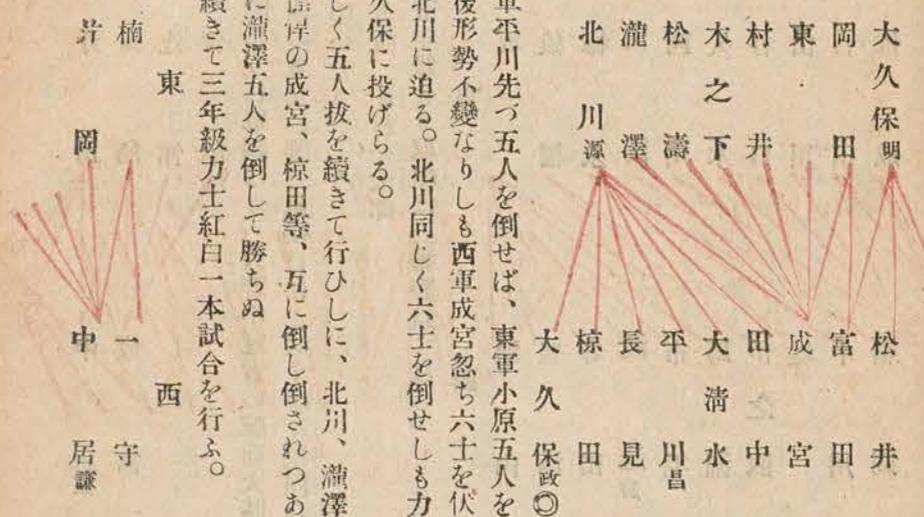
(八商 岩田 本校 音羽〇〇)

兩軍共に大差なかりしも長尾出でて杉立植田木村音羽を燈し大將松原も空しく長尾に押附けられて白軍はついに大將草場を燈して大捷す時に城山の鐘ポーンとなりて午後四時なりき尙本日は八幡商業より岩田選手の御來會を蒙り一段の盛況を呈しき

西軍平川先づ五人を倒せば、東軍小原五人を回復す以後形勢不變なりしも西軍成宮忽ち六士を伏せて大將北川に迫る。北川同じく六士を倒せしも力盡きて大久保に投げらる。

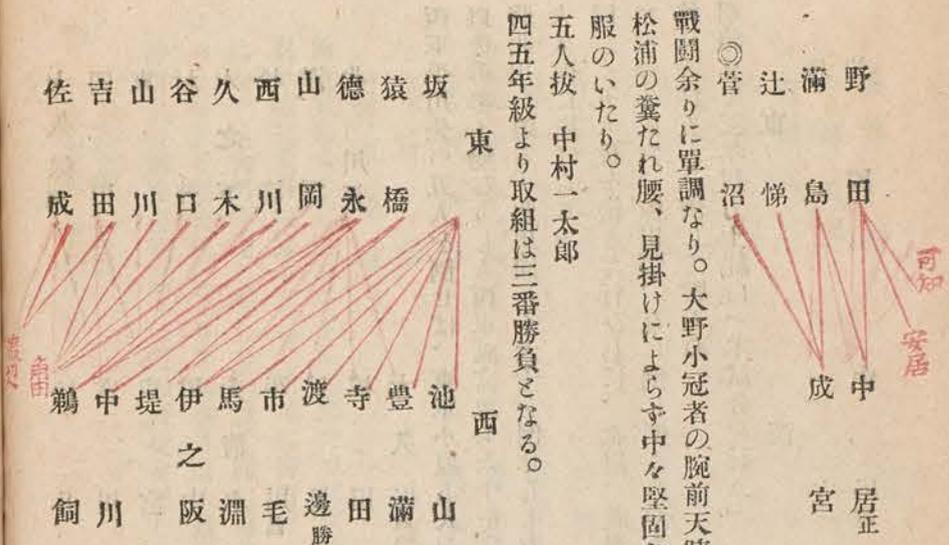
同じく五人抜を續きて行ひしに、北川、瀧澤の精銳に瀧澤の成宮、椋田等、互に倒し倒されつありしが終に瀧澤五人を倒して勝ちぬ

引續きて三年級力士紅白一本試合を行ふ。



戦闘余りに單調なり。大野小冠者の腕前天晴く。松浦の糞たれ腰、見掛けによらず中々堅固なるは感服のいたり。

五人抜 中村一太郎
四五年級より取組は三番勝負となる。



第十九回 生垣飛越

三年級生徒中殊に優秀なる者のみを選抜して各二十名許の紅白二組に分ち生垣六ツを飛び越さしむ飛び足らずして生垣を到す者ありとび過ぎて二ツ一緒に——マサカそれ程にてはあらざるべけんもとび過ぎて勢余りて前にのめるあり 遂に赤組の勝に歸す

第二十回 載囊

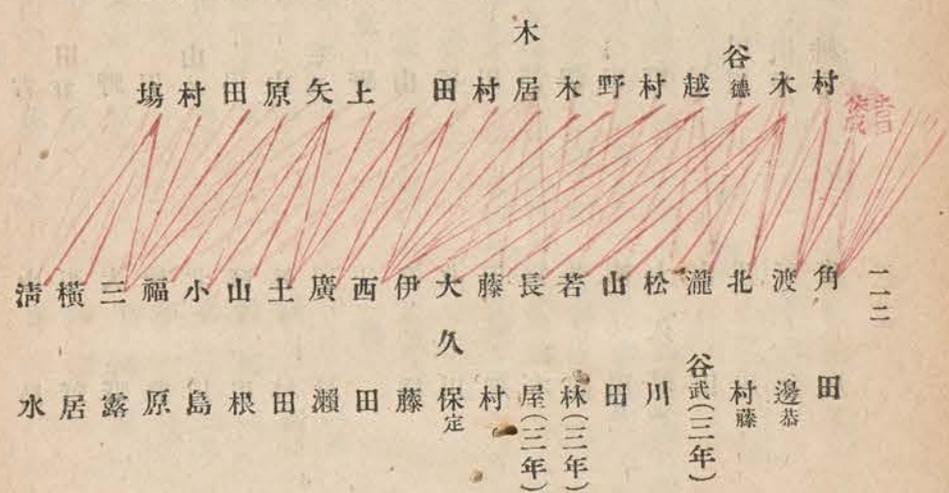
一着 小原 寛 三十一秒
二着 加藤驍夫 三着 山内寅雄
小學生徒の競争を見るが如し

第二十一回 載囊

一着 大久保政雄 三十一秒
二着 吉田久二郎 三着 大谷仲次郎
第二十二回 二百米

一着 藤野幸太郎 三十秒
二着 水田 三郎 三着 竹村春雄
藤野疾走振り中々しつかりせり三十秒のレコード
は見事——しかも二年級にして
第二十三回 二百米

◎木上松野井原谷中波三片松三瀧皆中



第二十四回 八百米

一着 菅沼廣次 二十九秒
二着 水原 完 三着 田中徳之助
一着 谷口惣次郎 二分十五秒
二着 三木淇久夫 二分二十秒
三着 倉垣 數馬 二分三十秒
谷口なかのランナーなり始めより優勢の地を占めしかも余裕綽々たるあり至囑

第二十五回 八百米

一着 田中與惣彌 二分三十五秒
二着 柴田太四郎 二分四十秒
三着 布本 義道 二分四十三秒
田中偉大の体格を以て疾走又疾走 敏捷なり

第二十六回 母衣引

一着 中村太四郎 一分十三秒
二着 中村民之助 三着 小川桂瑞
秋風にひるがへる五色の吹き流し、頗る美事、
第二十七回 二分間
一着 松岡源之眞
二着 草場左喜造 三着 松川武吉